

2017/08/13

「人が求めているのは何？」

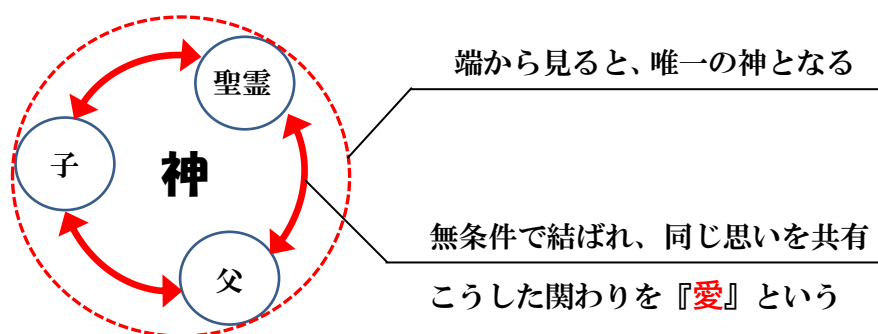
人は自分が何を求めているのかを知らない。知らないから、色々なものを求める。だが、それを手に入れても一時の満足があるだけで、「魂」が満たされることない。何を手にしても、「魂」は「空しさ」を覚え、孤独を覚えてしまう。一体人の「いのち」である「魂」は何を欲しているのだろうか。それが分からない限り、人は悩み苦しきさまよひ続けてしまう。では、「魂」が何を欲しているかを知るために、人がどのように造られているか、見てみよう。

● 人の構造

人がどのように造られたかを知るには、三位一体の神のことを先に知る必要がある。というのも、人は神に似せて造られたからだ。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて」（創世記 1:26）。人の造りのモデルとなった神は、ここに「われわれ」とあるように「三位一体の神」である。父、子、聖霊、と呼ばれる神を指す。

ただし、父と子と聖霊の関係には優劣などなく、誕生における時間的な差もなく、従属的な関係もない。互いに神としての「力」、「永遠性」を有し、互いに仕え合い、何事も一つとなって事をなされる。誰が偉いとか、誰の指示で動くとかということもない。誰が支配し、誰が支配されるという関係でもない。その思いは一つであり、互いの存在には互いが必要であり、互いに仕え合う中で事をなす。それゆえ、例えばキリストのうちには父の思いがあり、父のうちにはキリストの思いがある。「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように」（ヨハネ 17:21）。

すなわち、「三位一体の神」は「絶対的な信頼関係」で結ばれている。「絶対的な信頼関係」とは、互いが結ばれるのに条件を付けないことを意味する。無条件で相手を受け入れることを意味する。こうした神の結びつきを「愛」という。「神は愛です」（Iヨハネ 4:16）。それゆえ、神を端から見ると、それはまるで一人の神にしか見えない。そこには唯一の神がおられるだけとなる。ここから、「三位一体の神」と呼ばれる。図にすると以下のようなイメージになる。



人は、この「三位一体の神」に似せて造られた。そのために、人の「体」は土地のちりで造られたが、そこに宿る「魂」には神の「いのち」が吹き込まれた。

「神である【主】は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」（創世記 2:7）

「いのちの息」と訳された箇所へのヘブライ語を見ると、「いのち」と訳されているのは「ハイイーム」[חַיִּים]で、「複数形」の形をした単語である。ここでは三位一体の神の「いのち」を表している。次に、「息」と訳された「ネシャマー」[נְשָׁמָה]は「単数形」で、「魂」という意味もある。つまり、「いのちの息」が吹き込まれたとは、人の「魂」が神の「いのち」で造られたことを表している。

こうして、人は神に似た者となり、神が持つと同じ「愛」が備わった。神と無条件で結びつき、神と一つ思いを共有する者となった。神との一体性の中で生きる者となった。聖書はこの一体性を、「私たちはキリストのからだの部分だからです」（エペソ 5:30）と説明する。あるいは、人は神の中に生き、神の中で存在するという。「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」（使徒 17:28）。

このように、人の「本質」は神の「本質」であり、「三位一体の神」がそうであるように、人には「神との結合」を最優先する本性が備わっている。神と一つ思いを共有し、神との一体性の中で生きていこうとする性質を持っている。それは「神との結合」であり、それを「愛」という。そのため、人の「魂」は何があっても神を慕い求める。

「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえます。私のたましいは、神を、生ける神を求めて渴いています。」（詩篇 42:1-2）



ところが、こうした人の構造と、現実の人の姿は全く一致しない。というのも、人は「神との結合」よりも、人から良く思われる評判や富との結合を目指しているからだ。これは一体どういうことなのか。どうして「神との結合」を拒む現状になったのか、その原因が分からなければ、人の苦しみの意味も、苦しみの解決も見えてはこない。それには、アダムの時代に起きたある事件を知る必要がある。

● アダムの時代に起きた事件

当初、アダムは神と結びつき、神と一つ思いを共有する者であった。そのアダムからエバが造られたので、アダムとエバは神と一つ思いを共有する中で暮らしていた。彼らの「魂」は、靈的に神としっかり結びついていた。

ところが、そこに悪魔が登場する。ただし、聖書は悪魔の起源を沈黙しているので、悪魔はどこから来たのかは分からないが、悪魔は蛇を使ってエバを見事に欺いた。「しかし、蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」（Ⅱコリント 11:3）。

欺くとは、「×」を「○」だと思わせることであり、この場合だと、「神と異なる思い」を御心だと思い込ませることをいう。悪魔はエバを欺き、「神と異なる思い」を御心だと思い込ませたのである。一緒にいたアダムはエバに誘われ、アダムも「神と異なる思い」を御心だと思ってしまった。二人は欺かれ、「神と異なる思い」を心に入れてしまったのである。その結果、二人は神から食べてはならないと言われていた実を取って食べてしまった。これを、罪を犯すというが、罪の実体は、欺かれて「神と異なる思い」を心に入れてしまうことを指す。

悪魔に欺かれたにせよ、人が「神と異なる思い」を心に入れてしまったことで、神との間にあった一つ思いの関係は崩壊した。その瞬間、神との靈的な関係が壊れた。人は、神との結びつきを失ってしまったのである。そのことで、人は肉なる自分の姿しか意識できなくなり、初めて知った自分の肉の姿を恐れ、何かで隠そうとした。

「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」（創世記 3:7）

さらに人は、神との結びつきを失ったことで永遠に生きることができなくなり、その体は土に帰ることとなった。「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る」（創世記 3:19）。こうした出来事を「死」という。アダムの罪により神との結びつきを失う「死」が入り込み、その「死」はすべての人に及んだのである。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです」（ローマ 5:12 新共同訳）。それ以降、人は神との結びつきのない「死」の世界で暮らすようになり、その世界で生まれてくる子どもたちは誰であれ、生まれながらに神を知らない者となった。すなわち、「魂」は、もう神と結びつけなくなったのである。この事件から、今日の「愛」の現状が始まる。それはまさに悲劇の始まりであった。

● 悲劇の始まり

人は、神との結びつきを失ってしまった。しかし、いくら神との結びつきを失ったからといっても、神に似せて造られた「本質」を失ったわけではなかった。依然として、「神との結合」を最優先する「愛」は活動し、人の「魂」は神との無条件の結びつきを求めた。

「…… 私たちのたましいは、あなたの御名、あなたの呼び名を慕います。私のたましいは、夜あなたを慕います。まことに、私の内なる霊はあなたを切に求めます。……」（イザヤ 26:8-9）

そうであっても、神との結びつきを失った世界では、肝心な「神」の姿が見えない。そうになると、神に結びつこうとする「魂」は充足が得られないので、「神」の代替えを探そうとする。その代替えとなったのが「人」であった。

人は「人」に結びつこうとした。ところが、相手は結びつくための条件を突きつけてきた。というのも、人は神との結びつきを失ったことで激しい「不安」を覚えるようになり、その「不安」が、自分のせいでこうなったという思いを抱かせ、結びつきたければ「何々せよ」と脅してくるからだ。アダムとエバは、いちじくの葉をつづり合わせて腰のおおいを作ったが、それは「不安」に脅されたからそうした。「彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った」（創世記 3:7）。このように人は、神が見えない「不安」から、結びつくには条件が必要と思い込み、互いに条件を突きつけるようになった。

となれば、人は「人」と結びつくには突きつけられた条件を呑むしかない。しかし、条件を呑んだ瞬間、それは「ねばならない」という「律法」になり、人は「律法」に仕えることとなる。「律法」が人の価値を判断する物差しとなり、「律法」に違反する相手を見ると「怒り」を覚えるようになる。ここに「律法」と「怒り」の起源があり、この「怒り」が様々な罪の行為（違反）を誘発するようになった。すなわち、人は「人」に結びつこうとしたことで「律法」に仕えるようになり、その「律法」が「怒り」を招き、様々な違反を生み出したのである。

「実に、律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違犯もありません。」（ローマ 4:15 新共同訳）

それでも人は、何とか「律法」をクリアーすることで「人」と結びつこうとした。人から良く思われる行為を実行することで、「人」との関係を築こうとした。それは相互に条件を突きつけ合う関係であり、条件を満たすことで築かれていく。このような関係を「フィリア」（人間の愛）という。ちなみに、神が啓示された「神の律法」も、人は人と結びつくための条件に使い、人の価値を判断する物差しとした。人は、ありとあらゆる規則を、人と結びつくための条件に使い、人の価値を判断する物差しとしたのである。

このようにして、「魂」は充足を得ようとしたが、「魂」の欲していた充足は「三位一体の神」がそうであるように、何ら条件を突きつけない結びつきであったために、これでは充足など得られなかった。条件をクリアーすることで得られる「人」との結びつきには満足しなかった。それどころか「怒り」を覚えるようになり、「怒り」により様々な罪の行為が触発され、人は苦しむことになった。とはいえ、これは悲劇の始まりに過ぎなかった。

● さらなる悲劇

神に結びつこうとする人の「本質」は「神」の代替えを探し、「律法」をクリアーすることで「人」に結びつこうとしたが、実際には、それは非常に困難であった。多くの場合、「律法」を完全にはクリアーすることなどできなかった。そのことが、さらなる悲劇をもたらしたのである。これについては、子どもを例に説明しよう。

子どもは「神」の代替えとして、親に結びつこうとする。すると親は、子どもに結びつくための条件を突きつける。しかし、その条件があまりにも困難であれば、子どもは必死になって親に無理だと訴える。それを人は反抗と呼ぶ。だが、反抗が失敗に終わると、子どもは親が怒る事柄をむさぼるようになる。そのことで親の関心を引き、親との不健康な結びつきを築こうとする。親はそうした子どもの行動が分からないから、ただただ子どもを責め立て、不健康な結びつきに参加してしまう。ここから地獄のような苦しみが始まる。こうして、先に見た悲劇は、さらなる悲劇を生んだ。その悲劇は、これだけではなかった。

人は「神」の代替えとして「人」に結びつこうとしたが、どんなに試みようとも、条件を突きつけられるために全て失敗に終わった。「魂」は充足など得られなかった。それどころか罪が生じ、人は苦しむことになった。だから人は、他に「神」の代替えはないかと探した。そこで目を付けたのが、人格を持たないものであった。人は次に、「非人格」との結びつきを試みたのである。「非人格」であれば、結びつくための条件を突きつけられることはないからだ。ただ一方的に引き寄せるだけでよい。そうやって築かれる関係を「エロース」、あるいは「エピスミア」という。

しかし、これだと人の持つ「人格」は満足できない。満足できるのは、人の持つ「非人格」の部分、すなわち「肉」だけである。そうであっても、突きつけられる条件に堪えかね、人は「非人格」と必死に結びつこうとした。そうやって、「肉」なる部分だけでも満足させようとし、快樂に結びつく欲望が開花した。例えば、子どもが熱中するゲーム、大人が熱中する趣味や娯楽、酒やギャンブル、性的快樂などがそれに当たる。これにはお金がかかるので、お金もむさぼった。言うまでもないが、これは様々な罪の行為を誘発し、人を苦しめた。

こうして人は、「神」の代替えを探すことで、「肉」を喜ばせることには成功するが、「魂」は全く以て満たされなかった。それどころか、罪と呼ばれる様々な行為をするようになり、人

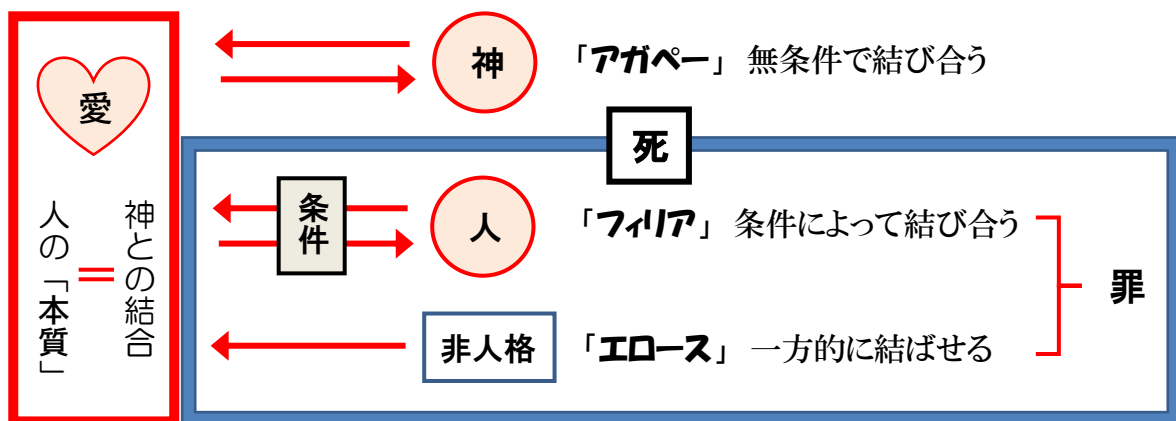
をひどく苦しめた。つまり、「死」が入り込んだことで、人の「本質」である「愛」は「神」の代替えを探すしかなくなり、そのことが人を苦しめる「罪」をもたらしたのである。「死のとげは罪であり」（I コリント 15:56）。まさしく今日に於ける私たちの「罪」は、「死」が人を支配することで生じるようになった。「罪が死によって支配したように」（ローマ 5:21）。

以上が、「愛」の現状の解き明かしである。この解き明かしから、「死」によって「神との結合」を欲する「愛」が、全く別のものに結びついていたことが分かる。しかし、このことが分かれば、そこから素晴らしい福音が見えてくる。

● 素晴らしい福音

人は「愛」の現状を知らない。知らないから、「愛」を大きく三つに分類する。一つは「アガペー」（神の愛）、一つは「フィリア」（人の愛）、一つは「エロース」（肉の愛）である。この三つを全く別物として取り扱う。そのせいで、「フィリア」や「エロース」から生じる罪は自分から出たものだと思い、自分を「ダメな者」と思って自分を責め立てる。自分には「アガペー」がないと言って失望し、こんな自分では愛されるはずもないと思ってしまう。これが、人を苦しめている。

しかし、見てきたように、「アガペー」も「フィリア」も「エロース」も、その底辺は同じ「本質」、神と結合しようとする「愛」がある。その「愛」が、「死」によって神との結びつきを断たれ、別のものに結びついたに過ぎない。「死」によって、「愛」の軌道が外れただけだ。この状態を「罪」といい、そこにいる人を「罪人」という。



そうした事情から、新約聖書で「罪」と訳されている主なるギリシャ語は「ハマルティア」[ἀμαρτία] が使われている。これは、「標的を射そこなう」という動詞「ハマルタノー」[ἀμαρτάνω] が語源になっている。「罪」とは、本来の標的である「神」から逸れてしまった状態を指すので、この言葉が使われている。ということは、逸れた軌道を修正さえすれば、人は「罪」の苦しみから解放されることになる。

何が言いたいかという、人は罪を犯す自分を見て、自分の存在を全否定してしまうが、それは間違いだということだ。人の存在を支える「本質」となる「愛」は健全であり、人は神に似せて造られた「良き者」であって、ただ「愛」の向かう先を間違えているに過ぎない。分かりやすく言うなら、人は迷子になっているだけであって、本人には何の問題もない。イエスの譬えを使うなら（ルカ 15:4）、人の状態はまさしく「迷い出た羊」である。ゆえに、自分を「ダメな者」と裁く必要もなければ、自分に失望する必要もない。イエスは、このことを誰よりも分かっていたので、「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません」（ヨハネ 12:47）と言われた。

これは何と素晴らしい福音だろう。人は自分の罪を見て、自分を「ダメな者」と思い込んできたが、そうではなかったのである。人は神に似せて造られた「良き者」であった。

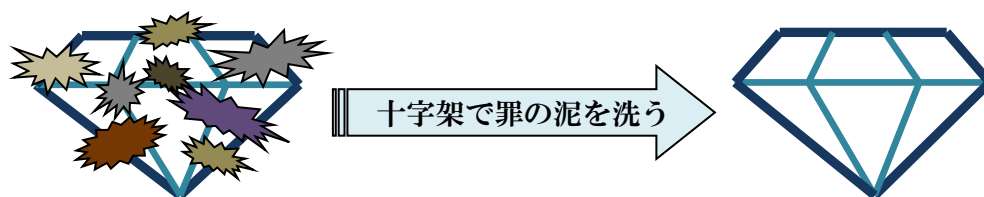
「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。」（創世記 1:31）

ただその「良き者」が「死」の妨害に遭い、神と結びつきたくてもできないで苦しんでいる。実質的に神を求められなくなり苦しんでいる。「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない」（ローマ 3:10-11）。求められなくなっても、人は「良き者」ゆえに「魂」は神を慕い求めてしまう。「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます」（詩篇 42:1）。それで誤った先に結びついてしまい、罪を犯す。しかし、人は「良き者」ゆえに誤った先では充足できず、罪に苦しむ。人の苦しみは、まさしく人が「良き者」であることを物語っていたのである。

このことが分かれば、キリストの御業が見えてくる。それは、「ダメな者」を「良き者」にする御業ではなく、「良き者」に付いた「死」という泥を洗い流し、「良き者」を惑わしてきたおおいを取り除き、正しい軌道に修正する御業である。人が持つ「良き者」としての「栄光」は「栄光」のまま大事にし、そこに付いた泥だけを取り、「栄光」から「栄光」へと主と同じ姿に変えていく御業である。

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」（Ⅱコリント 3:18）

このことをダイヤに譬えるなら、人の状態はまさしく泥の付いたダイヤである。しかし、ダイヤにいくら泥が付いていても、ダイヤの価値は全く変わらない。神はそのことを誰よりも分かっているの、引き取り手のなかった泥のダイヤを喜んで引き取り、泥を洗い流してくださる。これが、キリストが十字架で成し遂げられた御業である。



このように、キリストの御業は「罪人」を拒否するのではなく、「罪人」をそのまま招き、ただ軌道修正だけをされる。だから、キリストとしてのイエスは次のように言われた。

「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために（軌道修正させるために）来たのです。」（ルカ 5:32 *（ ）は筆者が意味を補足）

まことに人が犯す「罪」の根底には、神との結びつきを欲する「愛」が横たわっている。そこには「良き者」しかいない。これは何と素晴らしい福音であろうか。もう自分を見て、「ダメな者」と思わなくてもよいのだから。しかし、人はこの素晴らしい福音を知らない。自分の罪を見て、一方的に自分を責めて苦しんでいる。苦しみの意味も分からないまま、ただ苦しんでいる。誰もが何を欲しているのか気づかないまま誤ったものを求め続け、罪を重ねて苦しんでいる。何をしているのか分からないまま、人さえも殺してしまう。イエスはそうした人の姿を見て、次のように祈られた。

「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」
（ルカ 23:34）

人は本当に自分が何をしているのか分かっていない。自分の中に神と結びつこうとする「本質」があり、その「本質」が神との関係を失った「死の世界」で必死になって神を探し求めていることを知らない。神を探し求めて誤ったものに結びつく罪を犯していることに気づかない。神と結びつくことができないから、「空しさ」や「孤独」を覚えてしまうというカラクリなど知る由もない。まさに人は、イエスが言われたように、「何をしているのか自分でわからない」のである。分からないから、人は自分の罪を見て絶望する。自分なんか生まれてこなければよかったと自分を全面否定する。

しかし、自分が犯す罪の下に、神を切望する「愛」が横たわっていることを知ればどうだろう。自分が覚える「空しさ」や「孤独」の下に、四六時中、神を慕い求める「魂」がいることに気づけばどうなるだろう。人は、自分の苦しみの意味を知るようになる。それは神を切に慕いあえぐ苦しみだったと。すると、人は神をこう賛美するようになる。

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」（詩篇 119:71）